

日本体育・スポーツ・健康学会  
体育哲学専門領域

# 会報

Vol.27(2), August, 2023

## 記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

## 巻頭言

日常と非日常の認識不在の日本 ～Goodloser 概念が根付く以前の問題として～

高橋 正紀(岐阜協立大学)

1987年より勤務する大学の国外留学制度を利用しての1996年-97年のケルン滞在(ケルンスポーツ大学 専門継続教育課程 *spezielisierende Fortbildung* 学生として)での最大の事件(スラヴォイ・ジジェク的な意味で)は、現地で所属していたサッカーチームのゲームで勝利した際に、ゲーム中マンマークしていた相手が、ゲーム後に握手を求めてくると共に私のプレーを讃えたことである。この行為をその後の在独中のゲームで自チームの勝利の際に何度も体験することになるのであるが、欧米ではこの行為が“Goodloser (良き敗者)”という概念で表されている事実により帰国後の探求によってたどり着くことになる。

ドイツ留学の当初の目的は、勤続10年の節目の意図的なサバティカルを兼ねた自分のためと大学サッカーサークルの可愛い教え子達のための、サッカー大国ドイツでのサッカー指導者としての知見と力量の研鑽であった。しかし、この事件を経たことによって、体育教師の実技指導の主要な教材である“スポーツ”が、日本での体験・経験・学びでは得ることのできなかつた“想定外の教育的可能性”を持っていそうなことを直感し『スポーツの持つ教育的可能性の実践的探求』というライフワークがスタートを切った。

そして、帰国後10年近い理論面での探求と実技指導場面での実証過程を経て、2007年1月に日本のスポーツ界にこの概念を落とし込む為の「スポーツマンのこころ(現在はスポーツパーソンのこころ)」(論文化は2010年「スポーツマンのこころ」『岐阜経済大学論集』第43巻第3号及び2012年「“スポーツマンのこころ”の講義理解後のスポーツ実践が生きがい感と自尊感情へ与える影響」『スポーツ精神医学』9 医博論文)という知見にたどり着き、以後現在に至るまで日本国内で様々な対象への伝達活動(現在945回延べ67000名)を続けている。しかしその成果は、岐阜県で先日担当した高校運動部活動指導教員の研修会における確認では、Goodloser という概念を既知の受講生は100名超の参加者のうち数名のみであった。(その数名は以前に私の講義を講習会等で受講している方達)私が2007年以後国内で最も多くの伝達(350回超)を繰り返した岐阜県において Goodloser 概念は知識としてすら根付くことはなく“況やその行為をや”なのである。

では、その真因は何か?根付かない理由を上げれば恐らくきりはないであろうが、私の講義のハードコアリピーター(10回超)の方たちが共通して語る、講義受講を通しての核となる気づきは『スポーツが、我々の日々の仕事や生活(=当たり前にならなければならないもの)が行われる【日常】という時空間の中で、“遊び”(=たのしむもの)の一種として【非日常】の時空間に属していること。そして、その【非日常】の時空間は、面白さを

保障する“ルール”によって創られると共に守られた【日常】とは異なる意味を持つ時空間として成立していること』だそうである。

スポーツ哲学をかじった身としては、学生時代からホイジンガやカイヨワなどを学ぶ過程で、当たり前近く腹落ちしているこれらの理解が、スポーツが文化となっていない日本の巷では全くと言っていいほど当たり前とはなっていないのである。結果、スポーツでの敗北の際に自分がたのしむための【非日常】にいることに気づけず、敗北を「この世の終わり」(＝日常の終わり)の如く捉えてしまう傾向が強まる。さらに、この世を終わらせた原因の諸々(ex.自分の不出来、仲間のエラー、審判のミスジャッジ・・・)は後悔や憤慨の材料となり、そして勝利を奪った相手 **opponent** が憎き敵 **enemy** となってしまう。だから、負けを潔く認めて相手を讃える **Goodloser** になる事など、夢のまた夢にならざるを得ないのが当たり前となるのであろう。

とりとめなく書いてしまいましたが、スポーツ哲学をかじった体育教師の実践知を参考までにお伝えしました。(日常―非日常の基本理解については図式入りで「女子体育」2023年春号に少し詳しく説明してあります)

体育教師 高橋正紀 (takahasi@gku.ac.jp)

## 体育哲学考

### 身体と時間・空間

高田 哲史

少年の頃、私には二つの疑問があった。一つは時間に関する事、もう一つは空間に関する事だ。(私は1950年、昭和25年生まれ)

時間に関しては、私(その頃の私は、私の身体が私だと考えていた)の周りの事物は、果たして私と同じ時間に存在しているのだろうか、という疑問だ。私が見ることが出来るすべての事物は、光があるので私にはその存在が確認されると教えられていた。その光には速度があるとも。すると、私と私の周りには距離があるので、事物の光が私に到達するまでには、少なからずとも時間が経っている。私からみると、私を取り巻くすべての事物は過去の存在であるといえるのではないかと、という疑問である。宇宙レベルの天体ともなると、このことは明確であった。空間に関しては、「宇宙という空間の外には何があるのか」という疑問だった。どちらの事も、皆さんも一度は考えたことがあるのではないかと。

その後教員になっても、この2つの疑問を忘れたことは一度もなかった。1989(平成元年)年に大学院に内地留学する機会を得て、私はくしくも少年の頃にいただいた疑問解決に取り組むことになった。2年間の研究の末、それまでの私の考えをまとめ、かねてから疑問を感じていた私と私を取り巻く存在様態が、身体を中心とした自他のコミュニケーションにより支えられていると結論づけた。しかし、何かもやもやした気持ちは残った。

それから10年ばかり経った2001(平成13)年の初夏に、私はドイツの哲学者、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』の訳本(細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、上下巻、2000年)を読む機会を得、一気に読み上げ強い衝撃を受けた。続いて、ニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』の訳本を読み、かねてから抱いていた二つの疑問が一気に解決したと感じた。ハイデガーの「現存在」と「世界内存在」の関係と、ニーチェの「私は身体であり魂である」という考え方が、私が「他」と考えていた存在も「自」の一部であり、私は私の身体を通じて「自自」のコミュニケーションをしていると気付かせてくれたのである。

「私を取り巻くすべての事物は過去の存在であるといえるのではないかと」、「宇宙という空間の外には何があるのか」という二つの疑問は、少年の頃の私の理性の仕業による疑問であった。時間・空間は人間の最も高度な理性の一つだ。認知症になると、これらが壊れる。

意をすべて尽くせぬが、50歳すぎにやっと、私が「今まで」「ここまで」と、「今から」「ここから」と共に、「今、ここ」というかけがえのない時間と空間に生きているということに気がついたことはまさにびっくりする出来事であった。私は、身体をとりまく現象について、これからも関心を持ち続けたいと考えている。

少年の頃からずっと50歳を過ぎる頃まで感じていた疑問は私なりに解決できた。私の妻にこの話をすると、「考えても仕方ないことをよくもそんなにずっと考えていたわね」と笑われた。確かにそうだなと私も一緒に笑ったが、そんな自分が少しも嫌ではなかった。

哲学の語源が「知を愛すること」であるということ、私は「体育哲学専門領域」の一員として実感している。西洋哲学で、中世のスコラ哲学からの超克脱却を目指した近世から近代の哲学者たち・・・デカルト、カント、ショーペンハウエル、ヘーゲル、キルケゴール、ニーチェ、フッサール、ハイデガー、さらにそれらの哲学に影響を受けたベルクソン、メルロ＝ポンティたちや、京都学派の西田幾多郎、和辻哲郎ら、多くの哲学者たちが最後に題材としたのは「身体」であった。

学校の中だけでの身体教育でなく、人生全体での身体教育に目を向けなくてはならない。身体教育とは何か、またそれを支える望ましい身体と教育とは何かを追究することを「体育哲学」は目指さなくてはならない。

高田哲史 (takata2010phd@yahoo.co.jp)

## 書籍紹介

鑄物美佳(2018)『運動する身体の哲学—メヌ・ド・ピランと西田幾多郎—』萌書房

高橋 浩二(長崎大学)

本書は、メヌ・ド・ピラン(1766-1824)と西田幾多郎(1870-1945)の哲学を「運動する主体/身体」から架橋し、「運動を記述する哲学を展開」している。著者の鑄物は、「運動の中で得られる感情、あるいは運動の中で刻々と生成する感情」について「運動する主体の内的視点から」(p.vii)検討し、その哲学的基礎を見出そうとしている。本書で注目すべき点は、ピランの「意志的運動と自然発生的運動とは、自らがその運動をする立場にならなければ識別できない。」(p.37)という立場の設定である。鑄物によれば、「ピランは運動を、純粋な感情より意識の発達した次元に、そして感覚的経験よりは根源的な次元に、すなわち無-人格的な感情を除く感覚やその他の経験を基礎付けるものとして考えていた」(p.65)という。ここにピラン哲学の独創性が見出されると言えよう。別言すれば、「実用的な目的は持たず、自分自身の運動に集中して、それを行うとき、他のどの場所でもないその運動を担う身体器官との出会いにおいて、自分自身が存在していることがはっきりと感じられる。」(pp.70-71)のである。この身体について、ピランは「固有身体 *corps propre*」に着目している。「固有身体とは、〈私〉にとって感じられる〈私〉自身の身体のこと」(p.55)である。鑄物によれば、「固有身体は〈私〉が生きているという事実と直結している。…中略…。起源的反省としての意志的運動こそが、身体として〈私〉が存在していることを直接的に開示する」(p.230)という。自らの身体が為す運動は自らの生と存在と直結し、ありありと自己存在を開示する。だからこそ、我々が運動を実践する時の高揚感や苦しさといった感情は正に実感なのであり、その実感が私固有の身体に気付かれるのである。

この「気付く」は、ピラン哲学において重要な概念であり、「覚知」と説明される。鑄物によれば、ピラン哲学における「覚知」は、「そこからカントの統覚 *Apperzeption* を連想するよりもむしろ、それがフランス語の動詞としては『気付く』という意味を持っていることが考慮されるべきであろう」(p.69)という。この覚知には二つの覚知がある。一つ目は、「気付く」としての覚知であり、二つ目は、「起源としての覚知」(pp.78-79)である。それに対して、西田の「自覚」は自己自身を知ることであり、世界が自己形成することである(p.193)。

ビランにとっては「固有身体が最初に作られる道具」であるのに対して、西田にとっては「表現行為と自覚の関係」(p.228)が重要である。また、ビランの「意志的運動」は、西田の「作ること、すなわち創造として深められる」のである(p.232)。ここに一つの結論が見出される。ビラン哲学と西田哲学の架橋は、次のように示される。

意志的運動によって、われわれは世界の自己形成作用に参加する。運動において〈私〉が〈私〉を知ることは、〈私〉の身体のあり方を作ること、あるいは〈私〉の身体を通してものを作ることである。そのとき運動は、身体として生きる〈私〉について内的直接的に覚知させるだけでなく、同時に世界そのものが生成発展することに参与せしめる。(p.232)

我々が体育やスポーツ、身体を哲学する者である限り、「自らがその運動をする立場」になることは、出発点であり、原点でもある。さらに言えば、身体教育や運動実践に関わる指導者や学習者にとって、この立場から生じる感情は否が応でも実感として現れる。この実感に気付き、それを受け止め、受け入れる身体の教育が必要となる。

高橋浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp)

## 私の研究

### 10年間の総まとめ

高橋 徹(岡山大学)

「私の研究」の執筆は2度目になります。『会報』第16巻第1号(2012年4月発行)に、大学院博士課程3年次の私が書いた「私の研究」が掲載されております。『体育学研究』第67巻(2022年発行)に掲載された拙稿「戦後の体育改革に影響を与えたデューイの教育論の射程：矮小化からの解放と議論の前提の再構築」は、以前に「私の研究」を執筆した頃からの10年間の研究の総まとめの意味も込めて執筆した論文になります。今回はその内容を紹介したいと思います。

アメリカの教育哲学者デューイ(Dewey, J.)は、20世紀前半以降の学校教育の考え方に影響を与えた人物の一人とされています。デューイの教育論については、従来よりその理論の有効性を検証する試みが展開されてきており、研究論文はもちろんのこと、新たな邦訳書や関連書籍が継続的に出版されている近年の状況などを鑑みても、その理論が再評価されていると言えます。また、この傾向は体育学の分野でも同様であり、2010年以降、私も含めた多くの研究者がデューイを取り扱った研究を進めてきました。

デューイの教育論が日本の学校教育にもたらした影響としては、経験主義教育という新たな理念を生み出したことが挙げられます。そして、それは相対する系統主義教育との理念的論争を生み出す契機にもなりました。しかしながら、デューイの教育論を経験主義と形容することがデューイの矮小的解釈につながるという指摘や、デューイの教育論に与する立場と批判する立場のどちらもが彼の理論を拡大解釈する形で受け取ってきたという指摘も見られます。これらの指摘を真摯に受け止めるならば、デューイからの影響についての研究に取り組む際には、議論を進める上での前提として、デューイの教育論の主張や立場を正確に把握することが求められます。また、それは体育学の分野においても、デューイに関する研究が継続的に進められてきている現在だからこそ取り組む必要性のある課題であるとも考えられます。

このような問題意識のもとで、本論文では次のような議論を展開しました。①哲学上の思想的潮流の中でデューイが位置づけられるプラグマティズムの概念を整理するとともに、デューイの教育論に対する矮小的解釈が生じてしまう要因について検討し、デューイの主張や

立場を明らかにすること。②デューイの教育論が日本の体育学分野に与えた影響を明らかにする上で、前川峯雄が示した生活体育論に焦点を当てて考察すること。③前川の生活体育論に対する批判的な議論を展開した矢川徳光の主張を概観した上で、その主張の中に見られるデューイの教育論に対する矮小的解釈の問題点を考察すること。

紙幅の関係上、詳細な議論については本文を一読頂ければと思いますが、デューイの教育論の主張や立場は次のようにまとめることができます。本来のデューイの教育論は、近代教育が想定する系統主義対経験主義、受動的学習対能動的学習などの枠組みではなく、経験の再構成を通じた子どもの成長という教育観に立つことで、いずれの方法であるにしろ子どもの成長に対して意味のある経験を提供しようとする考え方です。したがって、それは従来の近代教育の枠組み自体の積極的な解体と再構築を目指した理論として捉えることができるのです。

さて、冒頭にこの論文は 10 年間の総まとめと述べましたが、まとめた側から新たな研究課題にも直面しました。つまり、まとめではなく、あくまでも研究の途中経過報告だったのかもしれない。したがって今後も継続して研究を進めていきますので、これからも忌憚のないご指導をよろしくお願い致します。

最後になりますが、昨年度まで本領域の研究担当を務めておりました期間、皆様のご協力のお陰で、コロナ禍でありながらも定例研究会を途切れさせることなく継続開催できたことにつきまして感謝申し上げます。

高橋徹 (t.takahashi@okayama-u.ac.jp)

## 箱根合宿研究会情報

### 箱根合宿研究会 2023 in HAKONE(第 2 報)

大津 克哉(東海大学)

夏期合宿研究会の開催について運営委員会で検討しました結果、今年度の箱根夏期合宿研究会を 2021・2022 年度に引き続きオンラインで実施することといたしました。開催場所となる宿泊施設の受け入れ条件や新型コロナウイルス感染リスクへの対応可能性、過日の参加申込締め切りまでの申込状況等に鑑みて慎重に検討いたしました。ご理解を賜りましたら幸いです。

オンライン開催以前の夏期合宿研究会には、研究発表の時間を越え、膝を突き合わせての議論や対話のような、まさにシュンポジオンを体現する場がありました。そうした場を思い起こしますと、対面開催を心待ちにしておられた会員の皆様に対しては、誠に心苦しい限りでございます。

今年度もオンライン方式とすることに伴い、参加申込の締切の延長をさせていただきます。参加や研究発表について、改めてご検討をよろしくお願いいたします。オンライン上ではございますが、皆様とお目にかかれることを楽しみにしております。

代表 深澤浩洋(筑波大学)  
事務局 田井健太郎(群馬大学)

期日：2023年9月16日(土)、17日(日)

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20時
16日(土)				研究会①				研究会②						オンライン懇親会 (大学院生による研究小報告とディスカッション)
17日(日)				研究会③				事務協議						

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 [otsu@tokai-u.jp](mailto:otsu@tokai-u.jp) までよろしくお願いいたします。

☆費用：無料 オンライン（Zoom）開催 URLは後日ご連絡いたします。

☆**8月31日（木）必着にてお申込み下さい。**

- ・Eメール：お名前、ご所属、メールアドレス、研究発表の有無、発表演題名（発表がある場合）を東海大学 大津（[otsu@tokai-u.jp](mailto:otsu@tokai-u.jp)）までお知らせください。
- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。
- ・すでにお申し込み頂いている方で変更がございましたらお知らせください。

☆詳しい「プログラム」は、9月中旬にお送りする予定です。

合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail：[otsu@tokai-u.jp](mailto:otsu@tokai-u.jp) Tel：0463-58-1211（代表）

（お問い合わせは、なるべくE-mailをご利用下さい。）

**定例研究会**

**第2回定例研究会のご案内**

佐々木 究（京都産業大学）

2023年度の「第2回定例研究会」は下記の要領で予定しています。詳細は決まり次第HPに掲載し、併せてメーリングリストで配信します。

日時：11月下旬～12月上旬の土曜日。

会場：未定。

発表申し込み〆切：10月中旬ころ。

佐々木究([sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp](mailto:sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp))

**事務局より**

田井 健太郎（群馬大学）

○「日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会」について

本年度の日本体育・スポーツ・健康学会大会についての情報は、大会web (<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss73/top>)にて閲覧することができます。本専門領域に関連するプログラムも、この学会大会HPに公開されています。現時点で公開されている日程は次の通りです。詳細はwebページよりご確認ください。

- ・大会3日目 9月1日(金) 会場：同志社大学
  - 浅田学術奨励賞・記念講演 10時10分～11時10分 会場：RY203
- テーマ レガシーとしてのオリンピック・パラリンピック教育の可能性

演者 岡田悠佑 (明治学院大学)

- 総会 11時15分～12時15分 会場：RY203 (同志社大学良心館 2F)
- 口頭発表① 09時00分～10時01分 会場：RY203 (同志社大学良心館 2F)
- 口頭発表② 13時15分～14時16分 会場：RY203 (同志社大学良心館 2F)
- 口頭発表③ 14時20分～15時21分 会場：RY203 (同志社大学良心館 2F)
- 口頭発表④ 15時25分～16時57分 会場：RY203 (同志社大学良心館 2F)

### ○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局 (<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>) にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

また、**専門領域メーリングリスト**にご登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局までご一報ください。メーリングリストに登録した**メールアドレス変更の際も、事務局までご一報ください。**

### 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：荒牧 (ai.aramaki@cc.musashi.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

### 体育哲学専門領域会報第27巻第2号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会  
体育哲学専門領域  
深澤浩洋 (代表)

編集者 荒牧亜衣, 石垣健二, 坂本拓弥 (広報担当)

発行日 令和5年8月8日

連絡先 〒371-8510  
群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地  
群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付  
電話：027-220-7326

### 【編集後記】

私はG県高崎市出身です。2006年以降、市町村合併が進み、帰省の度に驚くほど高崎の範囲は広くなりました。駅前の再開発も進み、周辺のペDESTリアンデッキも拡大しました。2016年には西口に高崎アリーナが竣工しています。私の専門種目VBに関しては、男子日本代表紅白試合がここで2021年に開催されています。VB男子日本代表といえば、先日まで開催されていたFIVB NLで3位という成績をおさめました。石川祐希選手の多方面にわたるリーダーシップはもちろんのこと、21歳の高橋藍選手の活躍にも目を見張るものがありました。二人には、大学在学中にイタリア・セリエAでプレーした共通点もあります。学生スポーツの射程についてもあらためて考える機会になりました。最後に、ご多忙中にもかかわらず執筆下さいました先生方に厚くお礼申し上げます。(A)